

■主墳と陪塚をつなぐ渡り土手■

唐櫃山（からとやま）古墳は、古市（ふるいち）古墳群では数少ない、帆立貝形（ほたてがいがた）の古墳です。

道路建設に伴って破壊された部分もありますが、全長が 59 メートルであることがわかっています。

また、允恭天皇陵（いんぎょうてんのうりょう）古墳の内堤に取り付くように築かれており、赤子塚（あかごづか）古墳と同様に、その陪塚（ばいちょう）の 1 つと考えられています。

凝灰岩（ぎょうかいがん）製の石室が知られており、帯金具（おびかなぐ）などの副葬品が過去に出土しています。

近年の史跡整備に伴う発掘調査で、注目すべき成果が得られています。

後円部の北側における調査で、允恭天皇陵古墳へと向かう渡り土手を検出したのです。

渡り土手では、埴輪の列が検出されました。

主墳と陪塚の関係性を考えるうえで、重要な知見といえるでしょう。